

日米医学医療交流財団 研修助成

研修報告書 (2014年度 助成者)

作成日 2014年10月21日

氏名 (フリガナ)	長澤 和 (ナガサワ マドカ)
研修名・研修地	アメリカ短期看護研修 (アメリカ・オレゴン州ポートランド市)
研修期間	2014年10月12日 (日) ~ 10月18日 (土)
所属機関名	御代田中央記念病院
身分	看護部 一般病棟 看護師

1日目はオリエンテーション、自己紹介等を終えて、現地の日本人ナースとの交流を行いました。3名の方から留学や臨床体験の話の話を聞きました。1名の方は日本で働かずアメリカで看護をスタートした方で、あとの2名は日本で何年かの経験を経てからのアメリカ留学という形でスタートした方でした。日本から渡米してアメリカの看護師免許を取得するには TOEFL 550 点以上であること・NCLEX-RN にパスすることで語学力・看護知識が求められることでした。また、アメリカでは看護の質を保つために2年毎に看護更新のシステムがあるということを知りました。日本では更新のシステムがないため、看護の質を維持するためには大切なことではないかと感じました。また、アメリカの看護師はIVHの抜去やドレーン抜去、アセスメントをしてから抗癌剤や薬剤の投与量調整など事前に十分に検討されたプロトコールにあわせ厳密に行うことが許されており、看護師のアセスメント能力や判断能力も求められることを学びました。アメリカには分野ごとのスペシャリストがいて、安心して任せられることができるためとても働きやすく、精神的に良い環境ということを知りました。日本みたいな雑務はほぼなく看護に集中できる点はいいなと感じました。

2日目は、プロヴィデンス・セントヴィンセント・メディカルセンターにてマグネットホスピタルについてレクチャーを受けました。マグネットホスピタルとは看護師が集まらない、すぐ辞めてしまうという悩みから看護師を引き付ける要素が体系的に指標として整えられ、クリアした病院のことで、認定されるには厳正な審査を受ける必要があることを学びました。今回訪問した病院は4回連続で認定されている施設で4回承認されている所が16施設ありその一つということでした。マグネットホスピタルに申請するために必要な書類を揃えるために2年もかかり、看護師間で言い合える環境であるか、看護師離職率が低く働きやすい環境であるか、患者ケアに対し工夫を施しどのように改善し一つ一つを解決に導けるか、チームワークを大切に、良い環境を整えているかなど必要な項目がたくさんあり、すごい労力と費用がかかっていることを学びました。日本は離職率がとても高く、このようなシステムがあり、看護師も働きやすく、患者に良いケアが行うことができる病院が増えれば日本の看護も変わってくるのではないかと感じました。

午後は、アメリカのヘルスケアシステムと看護の展望についてレクチャーを受けました。アメリカでは持っている保険によって受けられる医療が違うということを知りました。アメリカは貧富の差が激しく、医療が受けられない人達がたくさんいてアメリカ内で問題視されていて、全ての人が医療を受けられるようにオバマケアという方針に改善されてきているということを知りました。ただし、公益でコストを賄っているためコスト面でも問題を抱えていることが分かりました。全ての人が医療を受けられるような運動が行われている中まだ24州は拒否していて、メディケイドにもならない人達がたくさんいることを知りました。

3日目は、OHSU 付属ドーンベッカー小児病院にて院内見学とチャイルドライフプログラムについてレクチャーを受けました。院内は、小児にも分かりやすい様に部屋は動物や植物などの名前で見出し、覚えやすい工夫がされていました。また、病院という恐怖心をなくすため、院内は明るく、天井や壁には可愛い装飾がされていて、小児病院らしい院内となっていました。

小児は医療行為に関してはもっと恐怖を感じるため、それを和らげるための医師でも看護師でもない子供たちの心と身体に寄り添う専門家のチャイルドライフスペシャリストが存在することを知りました。治療や処置に対する説明を簡単な言葉を使い説明・教育・サポートして、時に人形を使い自分のおかれる状況を、子供が恐怖心を抱くことなく理解してできるよう工夫していることを学びました。また、兄弟の死に対する兄弟のケ

アもスペシャリストの仕事で、別れを言う機会を与えること、死という大きな出来事を消化することで、今後の将来に病院内の経験がトラウマにならないようにすることも大切な役割で、周囲にも欠かせない存在であることが分かりました。

午後はプロヴィデンス・ポートランド・メディカルセンターに行き、脳神経病棟とICUの見学と、急性脳卒中ケアのレクチャーを受けました。こちらのICUでは救急車で運ばれてきてドアを開けてから10分以内で医師に診てもらい、15分以内で脳外科医師に診てもらい、20分以内にCTを行い、tPA製剤投与を60分以内に行えるような確実な処置・治療ができるようなチームがしっかりできていて迅速な対応ができていることを学びました。また、患者がどんな状態であれ1日以内にリハビリをすぐ開始し、入院日数が平均4日で他の施設等に移っていると聞いたときは驚きました。脳神経病棟の見学もさせてもらい、2部屋の間に記録するスペースがあり、いつでも患者から目を離さないように工夫されていました。また、痙攣を起こす可能性のある患者にはモニターがあり24時間監視できるよう出来ていて、転倒に対するベッド対策もしっかりされていて学ぶことの多さに刺激を受けました。

その後に、オレゴン州尊厳死について聞きました。アメリカは個人の強調が強く、自分の人生は自分で決めるスタイルがあってもいいのではないかと考えたうえで生まれた尊厳死というスタイルで、以前まで尊厳死はあったが自殺と呼ばれていた。安楽死と尊厳死の大きな違いは、安楽死は医者が行う医療行為に対し、尊厳死は患者が処方箋をもらい、薬をもらって自ら服用することで、医師・患者が決断するのは一緒だが、その後の対応が違うことを学びました。尊厳死の対象となるのは、オレゴン州在住で6ヵ月以上は生きられないと余命宣告された方で18歳以上の方ということを知りました。まず、法的な段階を踏まなくてはならず、その中には15日間期間を置いて感情のコントロールをしてもう一度考え直してもらう期間が定められていることを知り、衝動的に行うことがないように慎重に行っていることが分かりました。実際、尊厳死に踏み込んだ人は高学歴や高収入の方が多いことを知りました。また、処方箋を書いたとしても、持っているという安心感で使用しない人も多くいることも知りました。身近にない制度で、自分には想像もできないくらいスケールの大きな内容のため理解するのに時間がかかりました。しかし、その人の立場になり、自分の人生を自分で終えるのもその人の人生になるのだと感じました。

4日目は、カラログ・テラス高齢者施設に行き、体操クラスに参加し、施設見学と居住者と交流をさせていただきました。この施設は17階建てで1階から5階までは看護の手が必要な方が入所されていて、いつでもナースコールが押せるように首からボタンをいつも持ち歩いていることを知りました。部屋もとても綺麗で施設とは思えないほどでした。美容室や郵便局、銀行もあり、住みやすい環境であると感じました。また、居住者の方とも少しの時間でしたが触れ合うことができ、笑顔が見られて、癒しの時間になりました。

午後はポートランド大学看護学部ラーニングリソースセンターで患者ロボットシミュレーションセンターを見学しました。ここは本当の病室やクリニックのような造りになっていて、実際現場で使用する医療機器があり、人体ロボットを使い実習することができる。人体ロボットは実際に脈が触知できたり、IVH・吸引・M-T挿入なども練習できコントロールルームから患者の症状を細かく設定し、ショック症状などリアルさを体験して学ぶことができ、実際看護師になり違和感なく働くことが出来るようになっていてことを学びました。リアルな実習ができるからこそ、質の高い看護を提供することが出来るのではないかと感じました。また、看護実習は州の法律で1000時間以上と定められており、臨床実習を行いながら学校でも実習を行う形で、日本では資格がなくてはできないこともアメリカでは実践できていることが教育にも差があることを学びました。

その後は、AMR救急指令センターへ施設訪問しました。ここは、消防とは別で民間救急として存在している。民間救急があることを初めて知りました。しっかりとエリアが決まっており、9分以内で現場に到着することができ、消防と病院と連絡をとりながら患者を搬送していることを知りました。ある程度の知識・技術はあり、プロトコルの範囲内であれば医師の指示なく投与や挿管などが行えるのもアメリカならではと感じました。

5日目は看護教育コーディネーターの役割について話を聞きました。パソコンを開けば科ごとにあつたプログラムを引き出すことが可能で、新人の実践までの架け橋のプログラムを行い、継続的な看護教育が実践され

ていることを学びました。新人には教育担当者が6～8ヵ月くっついて教育をしていて、臨床看護師には看護の質を上げるために、現場で教育を行っていることを知りました。教える基準も定められていて、質の高い教育を受けることができ、日本と教育の違いを感じました。教育をしていく場面で現場の看護師からの意見も取り入れ、改善していくこともプロジェクトマネージャーの役割で、この役割がいることでいい看護・教育ができるのではないかと感じました。

研修を終えて、初めての海外研修ということもあり、見るものすべてが新鮮で日本との違いに驚くことばかりでした。看護の役割について、日本は雑務も行うことが多いが、アメリカは一つ一つの役割に対するスペシャリストがいて、看護業務に集中できる点は羨ましく感じました。また、看護師ができることが多いアメリカでは教育体制もしっかりしている為、信頼され日本では医師の行為でも行うことができるのだと感じました。日本でも、患者の満足度を上げられるような看護が出来るように今後も働きたいと改めて思いました。今回の研修で今まで県内の病院しか見たことなかったですが、いい刺激を受け、貴重な経験を得ることができた為、今後の看護に活かしていきたいです。